

## 批判に答えて

加藤 正

### 一 弁証法の一側面の強調とは何か

本誌前号（第九号）百九頁の研究組織部報告によれば『加藤氏から機関誌第六号の自らの論文は弁証法の一側面を強調したにすぎなかったとの釈明があった』そうである。ところが御本尊つまり私はそんな釈明をやった記憶がないということをごここで釈明して置きたい。

現在研究会内部には客観主義に陥っている唯物論的態度が見受けられるそうである。これは真理の客観性を強調するということによつて、如何にも厳正な科学的認識であるかの如くであるが、この態度は恐るべき偏向を含むものである。即ちこの如き見解は、唯物論の単に一つの側面の意義の抽象的な理解に止り、しかも意識的に他の側面を覆いかくすという意図とつながるものだそうである。客観主義に非ざる立場の人がかく述べている（本誌第八号二五頁）。一体客観主義に非ざる立場とは何か。主観主義ではないのか。——いやそれは機械的な推測だ。現在客観主義は党派性の主張と対立しているのだそうである！

報告子は「実践によつて全面的に浸透された認識の弁証法をとく（船山）氏は、必然に加藤正氏等の客観主義的偏向と対立すると述べた」と記している。だが吾々の間で認識における実践の契機を眞の意味で捕えることを始めて提言したのは誰だったのか。エンゲルスの基礎的著述が誤解をもつて読まれないための老婆心から「自然弁証法」

に訳者言を書く必要を感じた加藤氏はその一人じゃなかったのか。

一体実践によって滲透されたとは如何なることを指して云うのだろう。認識は思惟が自分自身に生み出すのではない。だが実践がそれ自身で認識を生み出すでもない。認識は実践の齎<sup>もた</sup>らす諸経験を思惟が総合するところに成立する。実践はこの場合産業的実践から社会的政治的行動あるいは科学的実験観察まで、あらゆる意味で語られる。だから実践を基礎とするというだけで党派性を主張できるなどと考えるものは白痴のみ。超党派のから無党派の実践までがある世の中だ。弁証法的唯物論が人類の総実践の基礎の上に展開させられねばならぬという私の主張が、だから直ちにこの唯物論のプロレタリア的党派性を認めることにならなかつたのは言うまでもない。一側面の強調などでは尚<sup>な</sup>更<sup>ざい</sup>ない。私はただ党派性のない場処でそれがないと言っているだけだ。もしそこで党派性を主張するのは、まずそこに党派性があることを分析して見せてもらいたいものだ。弁証法的唯物論をプロレタリアートの実践の上にのみ基礎づけんとするものが、結局唯物論へ行けなかつたことをこそ私は分析したのである。私の批判者はまずそれを批判してもらいたいものだ。更に弁証法的唯物論は単に人類<sup>な</sup>乃至<sup>し</sup>プロレタリアートの実践を基礎とするというだけでない。すべての認識は人類の実践と共に発展したのだ。弁証法的唯物論的認識は人類の実践の基礎の上に発展したというだけに止まらず、対象をそれ自身の現実的な連繫の下で把<sup>とら</sup>えるという段階にまで進んだ所の思惟である。認識が個々の領域においてこの段階に到達するのにプロレタリアートの実践の中に立つ事が不可欠の契機であるなどという命題は証明不可能である。マルクス主義、レーニン主義の樹立者が、プロレタリアートの実践の諸経験の把握者であり評価者であつたと同時に、対象の正しき関係を把握した過去及び同時代の学問的労作の優れた評価者であり摂取者であつた事は偶然ではない。それこそがプロレタリア的党派の理論的力を強める不可欠の要素だからだ。弁証法的唯物論が之らの諸要素から成っているという性質こそ、事物のそれ自身の連繫を研究しつつ、無意識的に弁証法的唯物論に到達した「忠実な」科学者が、一定段階において自己の研究の反省から意識的

な弁証法的唯物論の支持者となる現実的基礎である。こういう支持者なしにプロレタリアート独力の実践で弁証法的唯物論が強固となるならお慰みである。

梯君は、第八号で、世界のそれ自身の把握として弁証法的唯物論を理解せよとの私の提言を肯定するものは誰か——ブルジョアジーではあり得ない、と述べている（一〇一頁）。勿論ブルジョアジーでもない、がまたプロレタリアートでもない。これらはすべて生産における夫々の位置によって、利害の共通性の意識によって結ばれた社会集団である。だからそれ以上の意識のためには、夫々の意識的分子、指導者、理論家、知識階級を持たねばならぬ。そして利害の意識を正しい認識の意識によって克服している場所からは、利害の連帯を止揚して自己を革命的な未来性ある階級に結びつける要素が生れて来るのである。正しい認識はその唯一の媒介である。科学団体がこの媒介を含まない限り、科学にとっても歴史にとっても無意義な存在になり終るであろう、と私は言ったのである。私は一般に科学の研究者特に唯物論研究会にその点を肯定してもらいたかったのだ。そして私は唯物論研究会がブルジョアジーであるかプロレタリアートであるかなどという噴飯に値する規定をこの場合無意味だと考える。

問題は科学及び科学者、知識及び知識階級をいずれの階級、いずれの党派が自己の側に結びつけ、自己の側に組織するかにある。そしていまの場合は結合の媒介が何であるかという点にある。第一にプロレタリアートは知識を、而も外ならぬ正しい認識を必要とする。歴史の正しい認識がなければ、歴史過程の展望と予知、従って政策（戦略と戦術）はない。客観的に正しい認識を種々の領域に於て取得せる頭脳は右の必要と結びつく。第二に、プロレタリアートは即ち指導の理論を、指導の結果によって吟味することを必要とする。実践の経験、実践が指導に対して提示する新たな要素・新たな条件を正しく認識する脳がなければ、指導の理論に新しい内容を与え闘争の実際の発展に合致しない部分を除去すること、即ち政策を發展させることはできない。正しい認識に基く政策の正しい立て方、経験の正しい分析とその核心の把握の仕方を理解している頭脳のみが右の必要と結びつく。

党派の理論、即ち、政党が自己階級を組織し指導するところの理論——党派性における理論乃至理論の政治的党派性はこれ以外の意味に解せられてはならないのだ——は、右の如き結びつきの基礎の上にのみ現実に発展するのだということを理解しないものは宗派的小児である。それは結局党派の理論を營養不良に非肉体化にそして觀念化に、党派性というレッテルのみに、終らせるものである。しかし乍ら、正しい認識はそれ自身で党派性を持つているだろうか。否だ。もし対象のそれ自身の連関における把握が何らかの党派性を持つとすれば、それはただ現実の連関の歪められた把握と相容れないという点においてだけである。即ち唯物論としての党派性だけである。レーニンは『唯物論と經驗批判論』において、唯物論が然らずんば觀念論か、その中間の道はない、という意味で、ただその意味でのみ唯物論の党派性を語った。またそれ以外どんな語りようがあるろう。私もまた唯物論の党派性をこの意味で語つたに過ぎぬ。唯物論の一面を語つたのでも強調したのでもない。理論の社会的勢力と結びついた党派性はそれがその社会的政治的党派の理論となるところから現われる。党派は階級の前進部分であり指導部分である。党派の理論は階級指導の理論であり、政策である。弁証法的唯物論のプロレタリア的党派性は、プロレタリア階級の弁証法的発展を觀念論的に曲否することなく把握、この発展の認識に基いて階級指導の理論を樹立するところ、樹立し得るところから生まれるのである。いまもし曲否なき正しい認識が『現代』の歴史に対して首尾一貫的に適用されるべき社会主義の勝利と資本主義の破局を結論するものとすれば、ここにこそ、正しい認識が資本主義の組織者たるブルジョアジーを去つて、社会主義の組織者たるプロレタリアートに赴く理由がある。客觀的に正しい認識のみが、歴史の新しい組織者たるべき勢力とその使命実現の條件を発見し、これに味方し、これを指導する。弁証法的唯物論がプロレタリアートによつて与えられるのではない、プロレタリアートが弁証法的唯物論を撰つてもつて自己の行動の指針としなければならないのである。現代の党派性擁護主義者諸君は、歴史の新しい組織者はまさに新しい組織者たるが故に正しい認識を生むのだと主張する、「諸君のレーニン」はそう言ったかも知れないが、「客

観的なレーニン」は『何を為すべきか』の中でこう言った——社会主義学説は所有階級の教養ある代表者即ち知識階級によって作り上げられた哲学、歴史、経済学等の理論より生れ出でたものである。その社会的地位から言えば、近代の科学的社会主義の創設者たるマルクス及びエンゲルスはブルジョア知識階級であったのだ。同様にロシアに於ても、社会民主主義学説は労働者運動の自然成長的発育とは独立に発生したのであった……

客観的に正しい認識、即ちその意味で党派的な、だが政治的には超党派的な理論が党派的理論即ちプロレタリアートの党派の理論を強めるという関係は、それ自身では何れの階級とも結びつくという意味で無党派的な社会層たる小所有者<sup>たど</sup>例えば農民が政策<sup>よろ</sup>宜しきを得てプロレタリアートに結びつく時その階級を強める関係とよく似ている。

私は唯物論研究会がその名の通り唯物論を、即ちエンゲルスが一般に存在の<sup>まま</sup>ありの俛の把握という以上に何らか特殊なものを意味しないと云ったその唯物論を、知識のあらゆる領域で擁護すべく期待したのである。それを党派の理論に高めること乃至<sup>ないし</sup>は党派に媒介<sup>く</sup>つける事、これは党派そのものに期待すればよいと思つたのである。所が党派性擁護主義者諸君にはこれが氣に喰<sup>く</sup>わなかつたのである。何故なら、彼等はプロレタリア的党派と弁証法的唯物論とは党派の政策において媒介的に結びつくという点を理解せず、弁証法的唯物論の真理性と客観性はそれがプロレタリアートの認識であるという点に根柢を持つと考えるからである。

## 二 党派性の擁護と哲学の課題

非常に物議をかもした拙稿『わが弁証法的唯物論の回顧と展望』の目的は、之まで左翼哲学界において遂<sup>ついに</sup>に批判されずに終つた立脚地に批判を加える事であつた。それは弁証法的唯物論の哲学を樹立しようと試みたわが開拓者諸君を殉教者たらしめた最後の陥し穴である。即ち弁証法的唯物論の本質をプロレタリアートの主観に還元しこの唯物論とプロレタリアートとの連関づけからこの唯物論の本質を<sup>せんめい</sup>闡明しようとする試みである。この立脚地こそは

福本イズムの哲学的基礎であり、三木哲学の出発点であり、わが「党派性」論者諸君の抛り処である。

私を批判した諸君は、みんな私が批判した右の立脚地を自明の理として取扱いそれをただ主張することによって私を批判しようとした。こういう批判が何等批判とならないことはいうまでもない。私を批判しようと思ったら、まず私が批判した右の立脚地の擁護から始め給え<sup>たま</sup>。そしてこの立脚地が私の批判によって何等つき崩されていないことの説明から始め給え<sup>たま</sup>。

梯君は「理論の党派性とはこのような物質的決定関係における限りのものである」と言われるが（本誌第八号一〇〇頁）、唯物論の形成についてのかかる命題の維持不可能を証明することこそが拙稿の眼目だったのである。私は梯君の闘争性をいつも尊敬している。願わくば、私のこの要求を念頭に置いて私を再批判して戴きたい。

ある人は私を茶化してしまえば、それで私の批判ができたと考えている。『プロレタリア科学』七月号で粟田夏夫という人が調子の高い力作を発表した。そして私を天国に祭り上げてくれた。私に気懸りなのは、もしや彼が地獄へ落ちはしなかったかということである。彼の私に対する批判は『（加藤）氏は、認識が、認識主体の実践的活動の中に於て把握されるものであること、その中に於て発達することを抹殺している』という主張に尽きる。そうとも！ 私はそれを抹殺した。しかし粟田氏よ、私が抹殺したものを、君が「加藤はそれを抹殺した」と言っただけで批判になりますか。梯第二世、私は君の論文を面白く読んだ。だがもし君が主観的興奮に駆られることなく、私の抹殺がいかに誤まれる抹殺であるかを親切に説明してくれたら、私はそれを有意義に読むだろう。私は真の認識が人類の総実践の基礎の上に展開されねばならぬと考える。しかし、認識が認識主観の実践の中で規定せられたとてそのままで弁証法的唯物論的なものとは受取れない。そもそも私は記憶する限りのレーニンの著書から、「認識主体の実践的活動」という奇妙な観念を思い出すことができないのだ。認識とは意識が対象を握むことである。認識の主体とは意識である。認識主体たる意識にとつては実践的活動もまた実践の経験とともに対象であり客体であ

る。レーニンは『唯物論と経験批判論』の中で主体と客体の区別は相対的だと述べた。階級闘争の領域では主体がプロレタリアートであり、客体が資本主義社会であるかも知れぬ。だが既にここでも闘争の領域によって主体は組合でもあり政党でもある。認識の領域では認識を取得し継承する主体は理論的意識である。尤もプロレタリアートがそれ自身として何らかの形態の意識を作り上げることがない訳ではない。而しそこには限界がある、とレーニンはいう。この意識は科学の真実の基礎の上に置かれぬ限りは、それ自身に委ねられては、階級意識の組合主義形態以上に出るものではない。科学の真実の基礎、対象をそれ自身の発展において把握する理論的意識は即ち正しい認識の主体は、世界事象の諸規定を巨細に分析しそれら諸規定を媒介づけ綜合するという意識の理論的活動の中に鍛えられるのである。従来 of 自称唯物論者が試みた様に階級闘争におけるプロレタリアートを分析して見ても、その中に唯物論的弁証法的意識の種子が蔵されているのを見出す事はできぬ。即ちプロレタリアートという社会階級からは弁証法的唯物論は発芽しない。ブルジョアジー或はプロレタリアートという社会階級の中に何か特殊な素質の頭脳が蔵されている訳ではない。

理論の党派性換言すればレーニンの党派の理論の擁護は、その理論をプロレタリアートが生み出したという意味で行うことは出来ぬ。プロレタリアートが生み出すものは階級闘争の実践であり力である。理論はそれを把握し導くものである。理論的認識における主観の本質を解体して第三のもの例えはプロレタリア階級に還元する事は、レーニンの『何をなすべきか』及び『唯物論と経験批判論』において分析せられた諸成果の無視であり、レーニンを歪めるものである。プロレタリアートの認識とは、認識主体たるプロレタリアートの認識活動の成果ではなく、客体たるプロレタリアートについて認識の主体たる意識の取得せる成果の謂いである。この成果によって、プロレタリアートに彼自身の使命を意識せしめ、それをその使命のために導いて来た理論、これがマルクス・エンゲルスの、レーニンの、レーニンの党派の理論である。かかる理論のかかるものとしての党派性の擁護はこの理論の下にプロ

レタリアートが闘い取つて来た既得陣地の擁護の爲にも、その陣地に立つて前進する爲にも必要である。理論の党派性の擁護は、プロレタリアートを認識主観に擬する立場から決定的に転向しプロレタリア階級闘争の使命と現下の地位との正しき認識を確保し發展せしめる立場に於て行われねばならぬ。理論の党派性の擁護は従つて次の諸要素から成り立たねばならぬ。

第一に、事物をそれ自身の現実的連関において把握する理論的思惟の擁護。栗田君はこの思惟を『形而上学的な、超社会的超歴史的な、人類の理論的思惟一般』であると考えている。全く驚くべきことだ。人類の諸経験を総括することによつてあらゆる形態の諸段階を経過して始めて弁証法的唯物論に到達した思惟の現段階の特質を、人類の歴史と切り離して理解してはならない。かかる理論的思惟はプロレタリアートにとつて生得なのだと思えるものこそ形而上学者である。この思惟の形成と特質、他の意識との対質は本誌第六号の拙稿で試みたところだが、この思惟の確立と發展は人類の自然並びに歴史に関する一切の経験を把握せしめることから行われねばならぬ。この把握を忘れた処から観念論的妄想は生れる。唯この把握に基いて観念弁証法は唯物弁証法に転化し、形而上学的唯物論は弁証法的唯物論に転化した。科学上の新しい発見が現われる毎に唯物論はその形態を変えねばならぬというエンゲルスの言葉をレーニンはその哲学的名著に引用している。科学上の新発見がプロレタリアートの独占物だと考える者があるだろうか。自然並びに歴史について真面目な研究を行いつつある総ての人は、この理論的思惟の成育に貢献できる。

第二に、資本主義社会の歴史と、プロレタリアートの歴史的使命およびその実現の條件についてマルクス及びエングルスが行つた唯物論的研究の擁護。

第三に、レーニン及びその党派によつて建設されたマルクス主義の發展即帝国主義、資本主義の一般的危機、社会主義建設に關する理論と党建設の理論及び戦術の擁護。



かかる党派性の擁護の細かい点をここでは述べて居られない。ただ一言哲学について言えば、既得の弁証法的唯物論の諸理論を、即ち事物のそれ自身の現実的連関の分析と実証の基礎の上に展開されたる諸理論を、まさにかかるとして、然らざる基礎に拠つて撓めんとする試みから擁護し発展せしめる場合、哲学はその方法的前提に関するのだという点である。即ち客観的真理が存在すること、認識はそのありのままの反映への接近であること、反映の最高主体は感覺的人間でも知覚でも悟性でも直観でも絶対理念でもなく理論的思惟であること、これらの点をあらゆる知識領域で確立し認識のこの段階にまで到達していない諸理論を前進させるにある。認識の最高主体たる理論的思惟について言えば、それは全哲学史をその背景にもっている。この背景をわがものにして思惟だけが哲学闘争の試練に耐えることができる。それは特殊な哲学を支持する闘争ではない。実証されたる知識を支持する闘争である。正しき認識のための理論的思惟の闘争は何等哲学同志の闘争でなく、主観的觀念を前提とする哲学と存在自身を前提とする実証科学との闘争である。觀念論と唯物論との闘争の本質はここにある。この闘争において建設されるものは特殊な哲学ではなくして、自然及び歴史それ自身の発展（現在吾々の認識の達し得る限りでは弁証法的な発展）のありのままの即ち唯物論的な反映としての諸科学である。エンゲルスは『フォイエルバッハ論』の中で言った——人々は実証科学によつて並びに実証科学の総果を弁証法的思惟をもつて総括することによつて達し得られる相対真理の追求に移る。かくて哲学一般はヘーゲルで完了すると。その場合もし哲学として残存する部分があるとするればそれは形式論理学と弁証法即ち思惟及びその法則の学である、とエンゲルスは別の箇處で述べている。最近レーニンの影響の下にこの部分への研究が進みつつあることは欣ぶべき現象である。それは模写論の論理学、認識論としての弁証法の研究という旗幟をもっている。此處に思惟とは、対象を把握する思惟、即ち認識主体としての思惟である。思惟法則とは、この認識主体が経験事実を与えられ、これを思惟固有の操作によつて処理し、弁証法的唯物論的認識にまで仕上げる場合の内的過程を指す。この過程の最も大規模な現れは哲学史であり科学史

である。今より後哲学の固有の任務がもしあるとすれば、思惟の弁証法的發展法則を知悉し、未だ弁証法的唯物論（自然及び歴史の發展のありのままの把握）にまで到達していない思惟にそこへ到達し得るための條件を意識させることに尽きるであらう。

私は、従来の哲学闘争が理論にとって何も齎らさなかつたとは決して言っていない。否わが哲学思惟の前進をこそ指摘したので。そして最後のヒツカカリを、この前進しつつある理論的思惟の最後のゴールへの前進のために指摘したので。栗田君は「レーニンはある認識が客観的真理であるかどうかは、それが超階級的であるかどうかによって分れるのではなく（これは自明のことだ——加藤）、逆にそれが革命的階級のものであるかどうかによって判断できると言った（!?)」と書いている。レーニンがそんなことを果して言うだろうか。栗田氏には一つの公式がある。曰く、政治的党派から生ずるもの——すべて真理。党派性は真理の源泉即ち絶対者である。党派性天国がここにある。ここには党派の發展の弁証法的理解の如きはみじんもない。プロレタリアートは神であり万能である。ボルセヴィキ党の建設者たるレーニンが党派をこんな風に理解しなかつたのはいうまでもない。栗田君は理論の党派性のお題目によって党派を形而上学的天国にしている、始めにロゴスありき、と。君は君の天国でいくらでもお題目を唱え給え。それは崇高なことだ。しかし党派は地上にある。それは發展せしめられなくてはならぬ。それは学ばなければならぬ。それは高められ強められなければならぬ。

栗田氏が福本イズムから現在までの哲学戦線史について語られたことに対しては、本誌上で批判を差控える外ない。

一九三三・七・六

(1) この問題は声のみ大きく嘗て正しく着手されていない。原田武氏の君島氏に対する覚書（本誌第十号）はこの問題に対する真の視

角を指摘して居る。因に原田氏のこの論文は哲学問題に関して近来にない深刻な暗示を提供している。注目すべき論文である。

（『唯物論研究』第一二号、一九三三年一〇月）

- 『加藤正著作集』第一巻（「加藤正著作集」刊行委員会、一九八九年十二月）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改め。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{dvi2pdf}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。